訳者あとがき

本書はジャン＝フィリップ・トゥーサンの小説 *La Vérité sur Marie*, Minuit, 2009 の翻訳である。

トゥーサンはデビュー作『浴室』（一九八五年、訳書一九八九年）以来、日本でもおなじみの作家であり、本書に先立つ七つの小説にはすべて翻訳がある。

『浴室』に続く『ムッシュー』（一九八六年、訳書一九九一年）、『カメラ』（一九八九年、訳書一九九二年）、『ためらい』（一九九一年、訳書一九九三年）、『テレビジョン』（一九九七年、訳書一九九八年）、『愛しあう』（二〇〇二年、訳書二〇〇三年）、『逃げる』（二〇〇五年、訳書二〇〇六年）に加え、エッセイ集『セルフポートレート　異国にて』（二〇〇〇年、訳書二〇〇一年）が刊行されているし、サッカー選手ジネディーヌ・ジダンをめぐる随想「ジダンの憂鬱」（二〇〇六年）の翻訳も文芸誌「すばる」二〇〇七年六月号に訳出されている。さらには、トゥーサンが監督した長編映画『アイスリンク』（一九九八年）のオリジナル・シナリオまで出版されているのだから――これはフランスでも、そして他のどの国でも刊行されていない――、トゥーサンと日本との縁は殊のほか深い。以上すべ

ての作品の翻訳を手がけてきた人間としては、ここに小説家トゥーサンの現在の充実ぶりを示す傑作をご紹介できることを心から嬉しく思う。

「ぼく」を語り手兼主人公として、そのとぼけたふるまいをとおし、現代の一断面をユーモラスに浮かび上がらせる。そんな作風に変化はない。日常のささやかなひとこまに眼差しを注ぎ、そこから意外な面白さを引き出す巧みな筆づかいもこれまでどおりだ。しかしそうでありながら同時に、ここでトゥーサンの世界はまぎれもなく大きな深化を示し、稠密さを一段と高めたという印象を訳者はもった。恋人同士として数年のあいだ暮らしをともにしながら別れたマリーと「ぼく」。すでに終わってしまったかに思えながら、しかしなお強い絆で結ばれている二人のあいだのなりゆきが語られていく。物語は真夏の灼熱にうだるパリの夜、離ればなれの二人が同時に、別々の相手と愛しあっているという鮮烈なイメージとともに幕を開ける。「ぼく」はマリーからの電話で呼び出され、突然の雷雨の中、彼女の家に向かう。ずぶ濡れになって「ぼく」がマリーのアパルトマンに到着したとき、その夜マリーが一緒に過ごしていた相手の男性、ジャン＝クリストフ・ド・Gが目の前を救急車で搬送されていった。それはいったい、どういう男だったのか。彼の容態はどうなったのか。そして真夜中に久々の再会をはたした「ぼく」とマリーのあいだには何が

起こるのか。

そこから展開されていく物語には、それが「ぼく」によって語られているがゆえに生じる微妙な――いや、根本的な――ひずみが生じていることに読者はすぐさま気づかれることだろう。マリーからの電話は午前二時前にかかってきたのか、それとも二時過ぎだったのか。マリーとの再会は四ヵ月ぶりだったのか、五ヵ月ぶりだったのか。細部にはさまざまな揺れが見て取れる。マリーと「ぼく」のあいだに大きな影を落とす人物の名前さえ、ジャン＝クリストフ・ド・Gではなく、実はジャン＝バティストが正しかったとあとから訂正されたりする。しかもそう断ったうえで、語り手は相変わらず素知らぬ顔で彼をジャン＝クリストフ・ド・Gの名で呼び続けるのである。

そんな一見、無造作な態度が逆に、作品の密度を高める方向ではたらいている点に本書の大きな特徴がある。何しろ、描かれている内容の多くは、「ぼく」自身が立ち会っておらず、本来真相を知ることのできないはずのマリーの私生活をめぐる事柄なのである。マリーとジャン＝クリストフ・ド・Gが東京からパリに一緒に戻ってくるあいだの出来事にせよ、あるいは彼女がひとり、亡き父の一周忌を過ごしに里帰りしたエルバ島での様子にせよ、いっさいは「ぼく」が多少の手がかりを頼りとして脳裏で思い描いたものにほかな

らない。「ぼくはマリーについての真実を知っていたのである」と語り手はいう（本書のタイトルは直訳すればまさに「マリーについての真実」となる）。それはいかにも無理な言い分だと思える。しかし同時に、作品を織りなす文章には、小説としての真実が確かに宿っていると感じられる。客観的な現実に密着しようと願いながら、「ぼく」の語りにはたちまち想像が混じり、彼のヴィジョンは「夢のあらがいがたい神秘」を帯びずにはいない。それが小説に大いなる可能性を与える。小説は「別の新たな真実」、「現実なるもののエキス」へと接近していくのだ。そして、微に入り細をうがつ描写が決してうつろではなく、充実した手ごたえを備えているとすれば、それは夢が無意識の欲望に根ざしているように、繁茂していく「ぼく」の言葉が、結局のところマリーへの想いに深く根ざしているためであることを読者は感じ取るだろう。

つまりこれはいささか不思議な体裁のもと、きわめて純粋な愛の脈動を伝える恋愛小説なのである。マリーの側がどう感じているのかは容易にはうかがえない。とはいえ、エルバ島でのふたりきりの海水浴シーンに楽しげに示されているとおり、両者のあいだに揺るぎない信頼や親密さが保たれていることは確かだ。しかしそこには、いったい自分は相手をまだ愛しているのかどうかを、どちらからも口にすることができない切ない曖昧さが漂

い続ける。「ぼく」は――そしてまたマリーも――その状態の中で呪縛されながら、同時にそれぞれの気持ちを育み続けるかのようである。

ただしトゥーサンの作品は、男女の心のそうした機微を、フランス文学の伝統芸というべき心理分析小説の形で提出するものではない。和んだかと思えばたちまち怒りの形相となり、「ぼく」に対して憤激をぶつけてくるマリーに対して、そもそも心理分析など無用の長物というだけではない。マリーと愛人の飛行機の旅が語られるかと思いきや、たちまち一頭のサラブレッドが暴れ出し、成田空港で大立ち回りを演じるといった突拍子もない面白さのうちにトゥーサンの真骨頂がある。それにしても、雨の降りつける成田空港を舞台とする、黒い馬相手の夜の追跡劇は、トゥーサン的筆法のひとつの到達点というべき素晴らしさだ。そこではすべてがアクションと化し、いっさいがゆくえのわからない運動のうちに巻きこまれていく。スリリングであると同時にユーモラスで、闇の絵巻でありながら煌(きら)めきにあふれ、スピーディーに勢いを加速させつつ、文章をたどる深い喜びを味わわせてくれる。

しかもこの唐突にして痛快な一幕の情景が、巻末のエルバ島の山火事、そこで炎に包まれる馬たちの姿につながっていくのだと知るとき、「マリーについての真実」と緊密に結

びついたイメージとして馬が選び取られていることが理解されるのである。馬と強い絆で結ばれたマリーは、根源的な生の躍動そのものへと「ぼく」を送り返してくれる存在なのかもしれない。

ところで、本作品が『愛しあう』『逃げる』とともに、「ぼく」とマリーを主人公とする連作の一角を担うものであることを付記しておかなければならない。前二作とはまったく独立して読める作品となっているが、本書を読んで興味をもたれた方はぜひ、前二作もひもといてみていただきたい。たとえば本書で一瞬触れられている「ぼく」の京都への旅については、東京・京都で繰り広げられる物語である『愛しあう』に描かれていた。あるいは「中国から戻って」云々という記述もあるが、これは『逃げる』で語られた上海・北京への旅のことを指している。その他、この作品に含まれるさまざまなディテールに前二作の記述がこだましていることがわかるだろう。しかしまた、この連作は直線的な時系列にしばられず、互いが互いを反射しあうような連関を保ちつつ、回転するカレイドスコープのようにマリーと「ぼく」の姿を映し出していくのである。『愛しあう』冒頭には「冬」とあり、『逃げる』冒頭には「夏」とあった。本書は「春―夏」である。ということはさらに「秋」をめぐる一冊によって連作は完結するのだろうと予想される。

そして本書の翻訳作業をほぼ終えたとき、フランスで「秋―冬」編が刊行された（Jean-Philippe Toussaint, *Nue*, Minuit, 2013）。タイトルを仮に訳しておけば『はだかのひと』とでもなるだろうか。トゥーサンが十一年の歳月をかけて実現した「四部作の見事な完結」（「ヌーヴェル・オブセルヴァトゥール」誌）に、各紙誌はこれ以上はないほどの賛辞を捧げ、作者の構想と文体の見事さを称えた。ふたたび東京が驚くべき出来事の舞台となるこの魅力あふれる最新作も、いずれぜひ紹介できればと願っている。

これまで集英社から刊行されてきたトゥーサンの作品を講談社から出していただくにあたっては、多くの方々のご厚意とお力添えに恵まれた。とりわけ講談社文芸局の山口和人さんは、この作品の面白さを直ちに感じ取ってくださり、翻訳の完成にいたるまで行き届いた配慮を惜しまれなかった。ここに心から御礼申し上げる。

本年十一月、フランス大使館の文化使節として韓国を訪れるトゥーサンは、本書の刊行にあわせて日本にも滞在し、東京、仙台そして京都で講演を行う運びとなった。日本の読者とトゥーサンの親交がこの機会にいっそう深まることを期待したい。

二〇一三年十月二十日

野崎歓

＊トゥーサンの著作中まだ邦訳のないものについて、以下に簡単な情報を記しておこう。

『ぼくの仕事部屋』（*Mes bureaux. Luoghi dove scrivo*, Venise, Amos Edizioni, 2005, coll. Calibano）。これまで自作を執筆してきた場所を回想したエッセイ。この本はイタリアでのみ刊行されている。

『切迫と忍耐』（*L'Urgence et la Patience*, Minuit, 2012）。創作の舞台裏を綴る文章や、プルースト、ベケット、ドストエフスキーについての論考を集めたエッセイ集。全十一編のうちには日本の文芸誌の依頼で書かれ、日本で初出となったものが含まれている。

『手とまなざし』（*La Main et le Regard*, Le Passage et Louvre éditions, 2012）。二〇一二年三月八日から六月十一日までルーヴル美術館シュリー翼で開催された、アーティストとしてのジャン＝フィリップ・トゥーサンの展覧会「書物（リーヴル）／ルーヴル」展のカタログ。トゥーサンへのロングインタビュー、および展示された写真やオブジェ作品の図版からなる。

さらに、近年トゥーサン自らが開設したホームページ上には、『浴室』でデビューする以前に書かれた小説第一作『チェス』や、同じくベケットの強い影響下にあった時期の戯曲『シーツ』など未刊行の習作や、刊行された作品のヴァリアント（異文）を含む貴重な資料が公開されている（http://www.jptoussaint.com/）。